ドSな甘姉とドMな妹っ！
小説 巨道空三
挿絵 大澤航
立ち読み版

序　章　姉妹のいる風景　006
第一章　一枚の布切れから　012
第二章　妹とのヒメゴト　043
第三章　お姉さんのヒミツ　066
第四章　教室の暴君　096
第五章　メイドさんでもタイラント　127
第六章　タブル暴君注意報！　159
第七章　湯煙姉妹風呂っ！　202
終　章　姉妹暴君（しすたあ・たいらんつ）　248

登場人物紹介

Characters

見城(けんじょう)かなみ

直毅の姉の大学生。二十歳過ぎのどじっ娘属性持ちで、家族を大事にするタイプのほんわかした女性。ことHとなると――。

見城直毅(けんじょうなおき)

ごくごく普通の学校生活を送ろうとしている少年。できのよい姉と妹に挟まれ、ちょっと気後れしている。

見城由真(けんじょうゆま)

直毅の妹にして、同じ高校に通うツンデレ系理不尽暴君タイプの少女。姉のかなみと比べるととがった性格でブラコン気味。

第一章　一枚の布切れから

全身の産毛が逆立ってしまいそうな鋭い快感。脇腹から背中にかけて、ほっそりと優美な指が撫で上げてきた。さらに首筋に赤い唇が吸いつき、今まで味わったことのない快感電流が全身に伝わっていく。

「ナオ君が私の下着でしようとしていたこと、見せてくれるでしょぉ？」

「そ、それは……くうっ」

いつものシャンプーの匂い。あの日に姉を抱きかかえた時以外ではこれほどに強く感じたことはない、憧れの女性の甘い体臭のまじった香り。セミロングの髪が首から肩にかけての肌をくすぐってくるのが、身体を震わせるほどに気持ちよかった。

「大丈夫。みんなしていることなんだから、恥ずかしくなんかないよ」

ビクン――ッ！

しなやかな指がズボンの上から触れてくるだけで、すでに痛いほどに勃起していた股間の器官はグイグイと布地を持ち上げようとする。滑らかな動作でファスナーを下げてしまうと、下着一枚の上から姉の手がペニスに触れてくる。

「しょうがないなぁ。それじゃあ、お姉ちゃんが手伝ってあげるね」

「ちょっ、ちょっと、だめだよ……んっ、んん――――っ」

唇全体が快感発生器になった気分だった。接吻、キス。口づけ。呼びかたも様々だけれどもそれも納得してしまうほどに気持ちがいい。信じられないほどに柔らかいくせにしな

やかで、少年のかすかな抵抗をあっさりと封じてしまうのは唇の魔力だ。
「ん、んちゅっ、ちゅぷ――っ」
ぴっとりと、一分の隙もないほどに密着したお互いの唇から脳を沸騰させてしまいそうに肉悦が熱してくる。憧れの女性の唇は快楽器官そのものだ。
「うふふっ。ナオ君のここ、すっごく大きくなってる……。感じてるのよね」
ようやく唇を解放してくれた姉の頬もかすかに紅潮していて、危険なほどに色っぽい。このまま彼女の肩を押さえつけて、自分の欲望をぶちまけてしまいたいほどだ。
間近に見るけぶるような睫毛。ふっと目が細められると黒瞳があまりに誘惑的だ。
「いいのよ。お姉ちゃんの身体、触っても……」
自分の手で、この女性の身体に触れる。柔らかく、水蜜桃のように滑らかで甘美な蜜を含んでいるだろうかなみの胸に、腰に、太腿に触れる。その想像だけで股間にそそりたつ男性器官は大きく震えてしまった。
「ここは正直なのね。うふふっ。いいわ。可愛がってあげる……」
いつベルトを外されたのかも記憶にはなかった。はっきりしているのは、いつの間にか姉のベッドに座らされていたこと。ズボンの前は完全に開かれ、ほっそりと優美な曲線を持つ姉の指がペニスを引っ張り出し、照明の下にさらしていたこと。
ワンピースの胸もとから十分に発達した瑞々しい果実がこぼれそうだ。胸の谷間は息苦

しくなるほどに深く、本当に鼻血が出てしまいそうに興奮していた。
「ね、姉さん……ダメだよ……か、家族で、こんな……くううっ」
そう口に出した瞬間、充血して硬度を増したペニスを強く握られてしまった。
「ナオ君はお姉ちゃんのこと嫌いなの？　悲しいなぁ……」
「そ、それは関係ないだろ……って、そんなにさすらないでっ」
人差し指と中指で輪を作るようにしてペニスの傘を愛撫し、残りの指で竿部分を握って快感を与える。心臓の一打ちごとに若い肉槍に血流が流れ込み、ますます硬くなる肉槍は信じられないほどに熱くなっていた。
「くすくすっ。家族でも、子供ができなければ大丈夫でしょ？」
「だ、だからそういう問題じゃ……う、うわっ、だめだって……」
そう言いながら頬に、首筋に触れてくる唇の柔らかさ。文字どおり溶けてしまいそうに柔らかい唇がねっとりと肌にからみついてくるようで、背筋の産毛が逆立ってしまう。
憧れていた姉の肌との接触の快感は童貞少年の想像をはるかに超えていた。姉の触れる部分が燃えるように熱く、痺れるような感覚は全身に広がっていく。ただでさえ敏感な亀頭粘膜は肉悦に張りつめ、ペニスはヒクヒクと小さい痙攣を繰り返していた。
「ほら、お姉ちゃんにナオ君のオナニー、見せてくれるんでしょう？」
「そ、そんな……姉さん……くううっ」

姉が少年の手をとって股間にいきりたつペニスに触れさせると、普段自分で触れている時とはまるで違う鋭い快感が背筋を駆け上がった。敏感になってしまっている。

彼女の髪が触れるだけで、指が肌をなぞるだけで。いや、その柔らかくもすべやかな肌が触れるだけでゾクゾクしてしまう。

男子生徒のワイ談の身体から力が抜けてしまうという現象が今自分の身体に起こっている。男として口惜しく恥ずかしいことなのに、姉の手にはなぜか抵抗できない。

（な、なんでこんなに柔らかくて……気持ちいいんだよっ）

たぷたぷと音をたてそうなほどに揺れる胸のふくらみ。しっとりとしたすべやかな肌。暖かくも柔らかい美姉の身体が少年の身体にからみついてきていた。いつも控えめで優しい姉と同一人物とは思えないほどの大胆さだ。

薄手のワンピースの下には、普段とは違い何も身に着けてはいない。肩紐がずれて豊かな丸みを見せる乳房が今にもはみ出しそうで、吸いつけられたかのように彼女のバストから目が離せなくなっていた。

「お姉ちゃんが手伝ってあげるね。うふふっ。あら、ナオ君の先っぽ、濡れてるね……」

嬉しそうなかなみの声とともに、熱い吐息が首筋に吹きかけられる。ぴっとりと肌を重ねてくる姉の瞳は間近で見れば見るほどにキラキラと危険な光を放っていた。

「くうっ。姉さん……そ、そんなにしたら……だめだよっ……ううっ」

「なあに。もう出ちゃうの？　ナオ君、ダメよぉ。もっと我慢しなくちゃ」
姉の漆黒の瞳が黒曜石のようにキラキラと光っている。彼女が楽しんでいる。ほのかに頬がピンク色に染まっている様子が艶麗だと思った。
「くっ……ね、姉さん……そんな……っ」
いかに心地よくても、身体が震えるほどの快感であっても、憧れの女性にもう出ちゃうなどと言わせるわけにはいかない。少年は背筋と尻にぎゅっと力をこめてこらえると姉の肩に手を添え、引き離そうとする。
「あん……ナオ君……どうして？」
悲しげな視線、湿っぽい言葉。泣き出しそうな眉。思わずゾクリとするほどに美しい姉の失望の表情。彼女にそんな顔をさせたくないと、いつも思っている表情だ。
（こ、こんなときだけその表情は卑怯だろっ……）
少年の力が緩んだ瞬間、かなみの身体はスルリと少年の手を抜けてきた。ベッドの上で、まるで体当たりするようにして弟を押し倒してしまった。
「ナオ君、お姉ちゃんを悲しませるつもりなの」
「そ、そんなことないけど……ま、まずいと……思うから……」
押し殺した声は隣の部屋で寝ている由真に聞こえないため。いつもならベッドに転がって雑誌でも読んでいるはずの時間に、姉のベッドで押し倒されてしまっている。

「もうっ。赤ちゃんができなければ平気だって言ってるのにぃ……」
「きょ、きょうだいなんだから……だ、だめだよっ」
「お姉ちゃんが大丈夫って言ってるじゃない。えいっ」
ぎゅっと竿を握りしめられた少年の全身に甘美な震えが走った。身体の力が抜けた瞬間に、ついにワンピースからこぼれた乳房が腕にあたってしまった。
「触っていいって言ってるのに、ナオ君ぜんぜん触ってくれないんだもん」
甘美な感触の前では身体に力が入らない。目の細かいスポンジのように柔らかいくせに内部がみっしりとつまっていて、しかも身震いするほどの肌の滑らかさ。姉の乳房は弟の目から見てすらため息が出るほどに豊麗で、そして柔媚だった。
びくんっ！　びく、びくんっ――！
いきりたつペニスは高まりきった射精衝動を解き放とうとするのに、肝心の姉の手コキが止まってしまう。先走りの粘液にドロドロになったまま、肉棒はヒクヒクとより激しい刺激を求めてうごめいてしまう。
「だーめ。お姉ちゃんも気持ちよくしてくれなきゃぁ」
「そ、そんな……まずいよ……ううっ」
首筋に吹きかけられる姉の吐息。耳元でささやく甘い、かすかに鼻にかかった声。射精直前に寸止めをかけられた下半身は甘くもせつない痺れに捉えられ、視界を埋める美姉の

肌と髪に欲望は泡立ち、沸騰している。
「ほらあ。お姉ちゃんのおっぱい、柔らかいでしょぉ？」
弟の手を自分の乳房と少年の胸板で挟むようにして、その柔らかくも張りつめた果実を押しつけてくる。もうたまらなかった。
「ね、姉さんっ……」
肩紐のずれたワンピースからまろび出た双丘の圧倒的なボリューム感が若い雄の本能を燃え上がらせる。指をくいこませれば、指が滑らかな乳肉にめり込み、姉の乳房に包まれてしまう。わしづかみのまま、その奥までもこね回すようにしてもみしだくと、掌に硬くしこった乳首があたり、さらに男の欲望中枢を刺激する。
「やっと触ってくれたのね。……ナオ君、気持ちいい？」
「う、うん。姉さんのおっぱい、大きくて……柔らかいよ」
目の前に差し出された美肉はあまりに魅惑的で、少年の理性は蒸発してしまいそうだ。指の間に乳首を挟むようにしてもみしだくと、甘い呻きが艶やかな唇から漏れるのが雄の欲望を刺激する。
「あはん……そうよ。最初はあくまでも優しく……」
指の間からこぼれる乳肉の感触だけでも射精してしまいそうなのに、たっぷりと量感ある乳房は男の指をどこまでも優しく受け止め、形を変えていく。滑らかな肌を愛撫するだ

けでも気持ちいいというのに、姉のせつなげな吐息が耳からも侵入してくる。
「あ、あんんっ。ち、乳首弱いの……でも、気持ちいいから……んんっ」
左右の乳肉の間にできた深い谷間に指を入れると柔らかい肌に包まれる感覚がたまらない。たわわに実った果実はあくまでもジューシーで柔らかかった。
（すごい……乳首が一回り大きくなってる……姉さんも感じてるんだ）
「うふふっ。お姉ちゃんのおっぱい、気に入ってくれたかしら？」
「す、すごいよ、姉さんの胸、大きくて柔らかくて……っ」
感触だけでなく彼女の反応が少年の官能をさらに刺激する。相手あってこその快感だということを思い知らされる。彼女の身もだえが、喘ぎが男の欲望をさらに高めていく。
ビクビクと震えるペニスを優しく包み込む掌が、しなやかな指がヌラヌラと粘液に輝き、亀頭粘膜を、竿部分を巧みにこすりたててくると下半身全身が熱せられたようなせつない快感がこみあげてくる。
「き、気持ちいいよっ。で、でも、姉さん……オ、オレ、もう……」
「わかってる。もう出したいのね。それなら……」
姉の溶けそうなほどに柔らかい唇が首筋から耳たぶまでに連続的なキスの雨を降らせてくる。それなのに、ペニスを包むしなやかな指は止まったままだ。
「お姉ちゃんの手でイカせてくださいって、言わないとダメ」

「そ、そんな、姉さん……っ。うっ、くううっ」
普段の控えめで優しい姉からは信じられない意地悪な言葉。こんなことはありえない、夢だと思いたい少年の脳内で何かが変化し始めていた。
「ほぉら、ナオ君のおちんちんがヒクヒクしてるよぉ」
柔らかい乳房をもみしだく掌は全体が乳肉と接触して姉の体温を、柔らかさを、そして甘い呻きを伝えてくる。もう射精寸前にまで追い込まれた下半身は姉に屈服してしまえとささやいてくるが、少年の道徳心と羞恥心はまだそれを許さない。
「うふふっ。我慢強いのね。そんなナオ君、好きよぉ」
耳元にささやきかける声はねっとりとして、それだけで少年の心を縛っていく。耳たぶにあたる吐息だけでもゾクゾクするほど気持ちよく、かなみの身体と接触している全身が気持ちよくてたまらない。
「我慢しなくていいのよ。お姉ちゃんの言うとおりにすればいいの」
「くっ、ううっ……で、でもっ」
ビクン、ビクンと大きく痙攣する亀頭に丁寧に粘液を塗り広げられると腰を引いてしまいたいようなせつない快感が身体の中心を貫いた。
「あらあら、おちんちん、こんなによだれ垂らしているわよぉ」
根元からカリ首まで、姉の細くもしなやかな指が巧みに刺激してくる。そのくせ、本当

に敏感な先端部分は刺激してくれないもどかしさにどうにかなりそうだった。姉の長い髪がサラサラと肌に落ちてくるだけでも快感がさざなみのように広がっていく。
「ほおら、言っちゃいなさい♪　楽になれるわよ？」
くいっとしなやかな指が鉤型にまがり、巧みにカリ裏を締めつけた瞬間、背筋に鋭い快感が走り抜け、股間のペニスが爆発しそうなほどの内圧にヒクついてしまう。もう限界だった。途切れ途切れの声は、震えていた。
「姉さんの手で……イカせてほしい。もう我慢できないよっ」
「やっと言ってくれた。うふふっ。ナオ君……かわいいっ」
嬉しそうな姉の声はそのまま途切れ、少年の唇を何か柔らかいものが覆っていた。
「えっ？　ね、ねえさ……んっ、んくっ……んっ、んん――っ」
柔らかく、あまりに密着度が高く柔らかい。かなみの唇だ。憧れの女性とのキスが、少年の蒸発しかかっていた理性を完全に吹き飛ばしてしまっていた。
ねっとりと柔らかい唇に捉えられた少年の口腔内に、ぬめりをおびた舌が侵入してくる。舌と舌、唇と唇の接触面から快感電流がお互いの脳髄に流れ込んでいるようだ。狂おしいほどに熱く硬いペニスは激しく痙攣し、姉の豊満な身体は汗ばみ、甘い体臭は文字どおり匂いたつほどに強くなっていた。
ビクンッ、ビクッ、ビクッ――！

ヒクつくペニスをしごきたてる姉の指がその圧力を高め、柔らかな指がカリから亀頭粘膜を集中的に攻め立てると、こらえにこらえていた快感がついに沸騰しあふれ出る。

ドピュッ！　ドピュドピュッ！　ビュルルルルッ――――ッ！

「んくっ、んっ、んんふっ――」「はううっ、んんっ、んあぁ――――っ」

お互いの唇を重ねたままのくぐもった呻きが可愛らしく飾られた若い女性の部屋に吸い込まれていく。姉の身体の重みが心地よく、押しつけられる柔肉はそれだけでも激しい快感を送り込んでくる。

（じ、自分でしたときよりも、ずっと……す、すごいや……っ）

射精しながらも、いつもの圧力が小さくなっていく感覚はまったくなく、肉槍は新たな快感を欲するようにビクビクと震え、首をもたげたままだった。

「はんっ……気持ちよかったよ、ナオ君。ナオ君も気持ちよくなってくれたね……」

姉のしなやかな指が全身を撫でてくるだけでも身震いしてしまう。情けないことに全身が敏感になってしまっているようだ。

「うふふっ。いっぱい出たね、ナオ君……」

いつの間にか用意していたウェットティッシュで快感に震える弟の若い肉茎を清めながら、かなみは続けざまに軽いキスを繰り返す。頬に、首筋に、そして唇に。

「ナオ君がいいコにしてたら、もっとイイコトしてあげるから、ね♪」

第四章　教室の暴君

妹の足から下半身で最後に残ったショーツが抜かれる。上半身はブラウスもリボンタイもきっちり身に着けたまま、ほっそりとした下半身は痛々しいほどに白く、滑らかな太腿はまだ青いながらも男の欲望を揺すぶるだけの魔力を放っている。

「ヘンタイのお兄ちゃん、あたしがもらってあげるね」

「お、おい、由真っ！」

身体が熱を持ったままやけに重い。下から見上げる妹の姿は今まで見たこともないほどに色っぽく、そして綺麗だった。メガネの下の瞳が潤んで挑戦的な光も消え去ると小さく、そして整った顔が陶然したまま見下ろしていた。

すらりと伸びた足は足首がきゅっと引き締まり、まだ細いながらも健康的なふくらはぎ、すべすべした膝からしっとりとしなやかな太腿へと続いている。太腿からY字を描く下腹部との間は照明に照らされて淫らな影を作り、恥丘を飾るまだ淡い繊毛はその影の中に溶け込んでいた。

「大丈夫。あたしが……望んでしていることだもの……んくっ……」

「ま、待てよ……うわっ……」

柔らかそうなお腹にかかるブラウスの裾。そこから覗く細い腰のライン。いつもほとんど意識したことがなかった胸のふくらみも小ぶりではあってもしっかりとその存在を主張している。腰を落としてくる妹の股間は暗がりに溶け込んでよく見えないけれど、それだ

けに淫らだった。
「ん……お兄ちゃんの……すごく……熱いんだね」
兄の腰をまたがるようにしてしゃがみこむ妹の吐息もせつなげだった。屹立する肉槍に触れる手はかすかなためらいを見せながらも、自分のもっとも大切な部分に導いていく。
「大丈夫。あたしはお兄ちゃんのダメさには慣れているから。安心して……んんっ」
「ぐうっ……こ、こんな……っ」
びくん――っ！
二人の粘膜が接触した瞬間の衝撃が兄妹の身体をこわばらせる。電流が走ったような一瞬の痺れは甘い快感を伴って少年少女の身体を走り抜け、それぞれの唇が押し殺しきれない呻きを漏らしてしまう。
「お兄ちゃんは……ヘンタイさんでも……あたしのモノなんだから心配……いらないよ」
「ば、ばか……っ。ほ、本当に……っ」
ブラウス姿のままほとんど膝立ちになった妹の内腿が腰に触れるだけでも背筋を快感電流が駆け抜ける。それほどに興奮しきったペニスの先端はねっとりとこぼれる粘液でコーティングされながらもビクビクと震えていた。
にゅぷっ。じゅぷじゅぷ――っ！
「あんっ……き、きついの……っ。ヘンタイのくせにぃ……お、おっきい……」

「へ、ヘンタイは余計だっての……は、入っちまうっ……ぬああっ」
細い指に導かれた亀頭部がまだ薄い恥丘のふくらみの下、淡い草むらに隠された秘裂にあてがわれ、可憐な花弁を押し割った肉槍がじっとりと蜜を含んだ花芯を貫いていく。
「あっ……あたってる……あたしの初めてのしるし……わかる？　お兄ちゃん……」
わかるわけはない。だが、動きを止めた妹の顔にはかすかなおびえが浮かんでいて、なんとかしてやらなくてはいけない思いにかられる。手を伸ばすと由真は両手でその手を掴んだ。まるでその腕が命綱ででもあるかのように。
「お兄ちゃん……優しいんだね……あっ、ああっ……ふ、深くなって……」
普段は勝気な少女が泣き出しそうな表情のままなのは耐えられない。握り返してやるとかすかな笑みを唇に刻んだ少女はゆっくりと腰を沈めていく。二人の接触部分が点と点からみるみるうちに面積を広げていき、ついには越えてはならない一線を越えてしまっていた。
ミチミチ――ク、クン――プツリ――ッ！
「ううっ、んっ、んんあ――っ。き、来てるよ、お兄ちゃんのオチンチン――」
何かが一瞬だけ強壮な男性器官の突入を受け止め、張りつめた何かはそのまま弾けて抵抗力を失う。それは錯覚だったかもしれないが由真の処女を破ってしまったという痛切な悔恨と、禁忌を犯している背徳の快感をさらに燃え上がらせる。

ちゅぷっ。じゅぷっ、じゅぷり――っ。

膣口の狭さを潜り抜けると、中は甘美な蜜に満たされた空間だった。柔らかく包み込んでくる肉襞がやわやわと肉槍を包み込みながら、全体から締めつけてくる。入り口の激しい締めつけとあいまって呻き声を漏らすのをこらえがたいくらいだ。

「い、痛く……ないのか、由真？」

「痛くなんか……ないもんっ。こ、これくらいで……」

口とは裏腹に表情はもう泣き出しそうだ。若干腰を引き気味にして、負担を少しでも和らげてやろうとすると、妹の表情がかすかにほころんだ。

「感じるよ……お兄ちゃんのを……こんなに奥で……ああんっ」

身もだえのひとつごとに揺れるツインテール。メガネの奥で、かすかに涙に濡れている色素の薄めな大きな瞳。光の加減によっては栗色というよりも金色に近く見えてしまう艶のある髪の毛が二人の動きに合わせて揺れていた。

直毅の手を両手で握る手は、少年の手を丁寧になぞっている。何よりも大切なものを確かめるように。少女の視線は明らかな熱を含んで不肖の兄から離れることはなかった。

「大丈夫か？　由真……初めてなんだろう？」

気遣ったつもりだが、ぷいと横を向かれてしまった。頬どころか首筋まで赤く染めたままのタイラントはなおも強がりたいらしい。顔をゆがめながらも動こうとする。

「ど、どう？　気持ちいいでしょ。お兄ちゃんヘンタイだもんね……ほら、ほらぁっ」
その言葉の裏にあるものが見えるような気がする。この生意気な暴君少女は彼女なりに兄を感じさせようと必死だとわかってしまう。
（ちくしょう。なんでこんなときばかり可愛いんだよっ）
そう思ってしまうほどに今の由真は可愛かった。いつものツンツンしたところがなくなってて、悪態まじりの言葉もどこかしっとりとして色っぽいくらいだ。何よりも、口ではどう言おうとも彼から決して目を離そうとしないその健気さがたまらない。
「大丈夫だ。無理しないで、ゆっくりとすればいい」
「あんっ……お兄ちゃんっ、お兄ちゃん……っ」
ぐいと腰を突き出すとせつなげな声が漏れるのに、心臓をわしづかみにされた気がした。少年の欲情に熱せられた脳髄にかすかに残った理性が蒸発した瞬間だった。ぐいぐいと下から突き上げるようにして腰を動かすと、絶対者として君臨しようとしていた少女の身体が硬直するほどの快感を覚えているのが見てとれる。
「あっ、ああっ、すっ、すごいの……。奥まで……きちゃうっ」
奥にあたる瞬間に彼女の中がきゅっと締まり、結合部分から蜜があふれる。花弁はすっかり濡れそぼち、湿っぽいいやらしい水音がリズミカルに響いていた。
「やっ、やだあ……。この音、恥ずかしい……っ」

「しょ、しょうがないだろ、こんなことしてたらっ」
彼女に掴まれているもう一方の手を伸ばすと、妹の手がそのまま自分の胸に導いていく。ブラウスのボタンを外していくのにも抵抗はなかった。
「む、胸まで触りたいなんて……やっぱりお兄ちゃんのエッチ」
「フロントホックじゃんか。由真だって期待してたんじゃ……うわっ」
最後まで言わないうちに、膣内奥深くに挿入されたペニスがキュウキュウに締めつけられていた。文字どおり処女の締めつけは強力なのだと思い知らされる。
「ゆ、由真はエッチじゃないもんっ。エッチなのはお兄ちゃんなのっ」
「そ、そうかよ……」
姉との秘戯で経験ずみとはいえブラジャーのホックを外すのは一苦労だったが、何食わぬ顔をしてそのまま愛撫に入る。むき出しになった乳房に触れた瞬間、妹の小さな身体が固くなった。
「さすがお兄ちゃん。あ、あたしの胸に手を出すなんて……やっぱりヘンタイ？」
悪態をつきながらも、その唇はおびえに震えている。心配はいらない。確かにボリュームこそ物足りないものの、シルエットは整っていて柔らかくて温かい。乳首は陥没気味だったが、指で刺激するとぷっくりとふくれてくる。
「そんなわけないだろ。由真のここ、可愛いよ」

「……！」
可愛いと口に出した瞬間、由真の動きが止まった。唇がかすかに動いたが言葉にはならない。すでに赤くなっていた頬がリンゴのように真っ赤になる。
「あ、あたしが可愛いのは当然なのっ。問題はお兄ちゃんがヘンタイだってことなの」
「なんとでも言えよ、もう」
由真は細めで未発達な身体にコンプレックスを持っている。姉のかなみは昔から発達が早く、同年代のころにはもう立派なプロポーションの持ち主だったからだ。
（でも……由真の身体も、これはこれで綺麗だよな……）
それは瑞々しい若葉を備える若茎のような美しさ。少女から大人へ変化が本格化し始めたばかりといった風情の身体は今だけの貴重な時間の中で移り変わっていく状態。胸やお尻のふくらみは本格的な成長を始めようとしていて、わずか一年後にも形を大きく変えているだろう。
「乳首、ふくらんできたぞ。可愛いな、これ」
「やっ、やだあっ。恥ずかしいこと、言っちゃだめっ」
だめと言われても事実は事実だ。たった今まで乳房の頂点で窪んでいた突起が大きく立ち上がってくる様子はひどく魅力的だった。
「ああんっ。そんな、乳首ばっかりぃ……ひゃあっ」

二人の腰の動きはすっかり止まっていた。それほどに、陥没乳首がピンと立ち上がる様子は魅惑的で少年の興味をひきつけていた。小さいくせに弾力があって、コリコリと指の間で転がすようにすると由真の唇が震え、甘い呻きがこぼれる。

直毅の手に余るようなかなみの乳房に比べれば、発展途上の由真の胸は確かに小さい。だが、片手で覆うようにするとぴっとりと手に吸いつくような肌と、しっかりとおさまるのがなんとも愛おしい。自分の手にジャストフィットしているような気がした。

「はあっ、はあ、はあ……」

掌で乳房を覆うようにして撫で回すとせつなげな吐息が伸ばした腕にかかる。熱かった。指を軽くくいこませるようにすると、かなみの柔らかく量感ある感触とは違い、硬さと弾力を強く感じた。かすかな痛みの表情に手の力を緩めるとぎゅっと腕を握りしめてくるのが可愛いと思う。

「由真の身体はスベスベだな……おれは気持ちいいけど、由真は気持ちいいか？」

「あ、あたしはお兄ちゃんと違ってヘンタイさんじゃ……ああんっ、ないもの……っ」

感じていることを認めようとしないのは計算ずみだ。素直じゃない妹は、どんどん押していくにかぎる。彼女が認めようと認めまいと、感じているのは確かだった。

「そうか。じゃあ、もっと可愛がってやらないといけないな」

「やあんっ、ああっ……だめぇっ……おっぱいばかりぃ……くうんっ」

胸のふくらみを可愛がれば可愛がるほど、乳首を指に捉えて転がせば転がすほどに妹の身もだえは激しくなる。自分の上で暴君があられもない声をあげているのはすがすがしいほどの快感だ。直毅のペニスもまた驚くほどに張りつめ、大きくなってしまっていた。

「乳首、もうピンピンだぞ。感じてるんだろう？　ほら」

「そ、そんなことないもんっ。へ、ヘンな感じがするだけ……ひゃううっ」

由真が可愛らしく鳴くと同時に彼女の内部がキュンキュンと締めつけてくる。まるで直毅のためにあつらえられた専用の鞘のようにぴったりと隙間なく包み込む感覚は彼女が小柄だからだろうか。

前を開かれたブラウスの襟に崩れたリボンタイがからみついたまま揺れているのがいやらしい。はだけられた胸に触れているだけで彼女の身体に緊張が走るのが愛おしい。

「やだあ……ヘンなの。あたし、おかしくなっちゃう……っ」

「おかしくなんてないぞ。それが……くうっ、感じるって……ことだから」

彼女の身もだえに快感が増幅され、二人の身体が反応してしまう。肉棒が反応すれば膣壁がヒクヒクと締めつけ、膣壁が反応すればそれに応えてペニスが痙攣し、硬度を増していく。快楽の無限連鎖だ。

「すごいの……あたし、ヘン、ヘンになっちゃった……恥ずかしいっ」

「ヘンじゃない。由真は、感じて、いるだけだ」

第七章　湯煙姉妹風呂っ！

少年の腰をまたいだ姉の胸が大きく震える。下から見上げると本当に大きく、綺麗に盛り上がっていることがよくわかる。

「お姉ちゃんの中に、たっぷりと出してね。お姉ちゃんも……ナオ君のが、欲しいの」

ささやくような声は欲情に濡れ、ねっとりとした響きをおびている。潤んだ瞳が、上気した頬が、そして湯煙の中にも艶やかな肌が直毅を求めているのがわかる。彼女がゆっくりと腰を落としてくるのから目を離せない。

全体に妹に比べると伸びやかで、そして豊かな曲線美で構成された肢体は胸やお尻が充実した実りを見せ、細い足首や締まった腰との落差が雄の欲望をかきたてる。

「ナオ君の、前より太くなっているみたい。大きく……なったのかな……」

大きくなったというよりは激しい興奮で膨張率があがっている。自分自身苦しくなるほどに激しい勃起は、マンガのように貧血になってしまいそうに熱い血流が脈打っている。

むにゅっ……じゅぷりっ。ニュチュルルル――――。

妹に比べるとぐっと豊かな茂みの下で、張りつめた亀頭粘膜が花弁を押しわけるだけで二人の呼吸が途切れ、せつない吐息が湯煙の中に溶けていく。

「あん……ん、んんふ……っ」「ううっ……」

直毅の顔をじっと見つめながら、かなみは肉棒を飲み込んでいく。パンパンにふくれ上がった肉棒は脈動する膣圧を押し返し、かきわけながら彼女の身体の最奥めがけて進む。

それはごく短い時間なのに、彼女の中にもぐり込んでいく鮮烈な快感が脳髄を直撃する。
「ん……。入ったよ、ナオ君……すごく熱くて硬くなってるよぉ」
そのまま夕闇に溶けてしまいそうな甘い声。ようやく暗くなってきた夏の夕暮れに姉の白い肌が鮮やかなコントラストで浮き上がっていた。
「んっ、んんふっ、ナオ君のおちんちん、ビクビクしてるね」
当たり前だ。締めつけこそ由真にゆずるものの、粘膜の密着感、内腿の柔らかさ、膣壁のうねりとたっぷり蜜を含んだ秘洞の柔らかさ。彼女の中にあるだけでも気持ちいいのに、彼女の腰のグラインドに応じて腰が勝手に上下し、さらなる快感を求めてしまう。
「くっ。ま、まだ敏感だから……これじゃあすぐに出ちゃうよっ」
「くすっ。だめよ。私を満足させてからね」
嫣然と笑う姉の喉もとに髪の毛が一筋流れているのがひどく色っぽく、年上の女性が自分の上で身体をうねらせているのを視界に焼きつけるように見つめてしまう。
「ね、姉さん、すごくエッチだよ……オレ、本当に我慢できなくなりそうだよ」
「くすっ……。恥ずかしいけど、エッチでいいよ。ナオ君のこと大好きだもの」
その瞬間、心臓が大きく動いた気がした。下から見上げるかなみの照れくさそうな、それでいてうっとりとした表情が胸を締めつけてくる。
「お、お兄ちゃん、あたしもぉ……大好きだよぉ……」

姉と兄がつながりながら喘ぎ、悶えているのを見つめる少女の表情はぽおっとして、潤んだ瞳がねっとりとした光をおびていた。
ちょっとすねたような唇は姉に先を越されてしまったからだろうか。力が入らない様子で身体を起こした由真は姉をうらやましそうに見つめていた。
ドクン、ドクンドクン――。
心臓の動きが激しくなっているのを感じる。それはただの肉体の興奮だけではないはずだ。姉と妹。かなみと由真を愛しく思う心がふくれ上がっていく。
「そうね。いらっしゃい、由真ちゃん。一緒に可愛がってもらいましょ♪」
かなみが手を伸ばすのに掴まった由真はそのままもたれかかるようにして姉に抱きつき、指し示されるままにまたがってくる。
かなみの魅惑的な肢体が視界から消えるのは残念だったが、同時に視界を埋め尽くすのは由真の細い腰と傷ひとつないお尻だ。その柔らかくも張りつめたお尻がさらに迫ってきて、少年の顔を押しつぶしそうな勢いだ。
「姉さん？　ゆ、由真、おい……て、うぷっ……んくっ、んんんんっ」
顔の下半分が妹のお尻の下敷きになってしまい、声がまともに出せなくなっていた。嫌でも鼻で呼吸せざるを得ない直毅を妹の発情しきった濃密な淫臭が襲った。甘酸っぱいような、表現しづらいオンナのナマの匂い。それがいつもは生意気で高飛車な由真のものだ

と思うと頭の中が真っ白になってしまった。
「ああんっ。ナオ君の素敵。もっと大きくなるのね……」
「ひゃんっ……お、お兄ちゃん……そんなに……舐めちゃいやあっ……」
妹のお尻はプリプリと弾力に富み、すべらかな肌が心地よい。唇に、舌に敏感に反応する声の震えが、背中のわななきが男の興奮をさらに誘う。
「やああっ、お兄ちゃんのお口がエッチすぎるぅっ……あっ、あふ……っ」
エッチでもヘンタイでもいいと思う。この二人をもっと、もっと気持ちよくしてあげたい。自分に身体を、心を捧げてくれる姉妹の全身を、その柔らかくしなやかな身体のすみずみまでも愛撫し、舐めしゃぶり、貫きたい欲望が膨張していく。
ズチュッ、ヌチュヌチュッ――。
二人の腰の動きが肌を打ち合う音と、蜜汁に満ちた膣内を男性器が穿つ音。いやらしい、くぐもった水音に二人の吐息と喘ぎ、それに身じろぎの音がまじっていた。
「はあっ、はあっはあっ――――」「ああっ、あっ、あんんっ……」
二人の声が夕暮れの涼しい風に溶けていく。二人の肌以外は目に入らず、二人の声や喘ぎしか耳に入らない。直毅の脳内はかなみと由真の二人でいっぱいだった。
唇に押しあてられる由真のお尻は柔らかく弾力に富んでいて、ともすれば窒息してしまいそうなほどだ。思わず鼻面に押しつけられた美肉にむしゃぶりつくと妹の肌がぶるぶる

と震える。おびえた声すらも快感に震えている。
「お、お兄ちゃんっ……そこっ……ち、ちが……違うの……またおかしくなっちゃうっ」
「あら、由真ちゃん、お尻も感じるんでしょう。よかったじゃない♪」
少年の身体をまたいで向かい合わせになっている姉妹はお互いに抱き合いながら身体をからませていた。いや、お互いに相手の身体にすがらないと姿勢を保てないほどに感じているようだ。言葉は落ち着いているかなみも呼吸はかなり荒い。
「か、感じたくなんか……ああっ、あ、ひいいっ……ゆ、許してぇっ」
「素直になれば、もっと可愛くなると思うぞ、由真……」
お尻の谷間に息づく小さな蕾は別の生き物のように震え、収縮し、直毅の口から逃げようと前後左右に、そして上下に揺れるのを唇で捉えると瞬間的に少女の呼吸が止まり、涙の玉ががじわりと睫毛の上でふくらんだ。
「そっ、そこはもうっ……おかしくなっちゃうのぉ」
排泄器官とは思えない綺麗な菊座はお湯に洗われてほとんど匂いもなく、むしろ少女の濃密な甘い体臭にクラクラするほどだ。お尻の奥にすぼまっている菊座の中心を舌でほじるようにして舐めると由真の細い背中が震えながら反り返った。
「きゃふうっ……そ、そんなとこ舐めちゃ……ひっ、ひいんっ……」
「ああんっ、由真ちゃん、そんなにしがみつかないで……くうんっ……あっ、ああっ」

妹に抱きつかれた姉がせつなげに身体をよじる。弟の肉棒を飲み込んでいるだけでも快感に腰をうねらせずにはいられないのに、抱きついてきた妹が首筋に、胸に唇を押しつけながら柔肉を掴み、もみたててくる。

「お、お姉ちゃんの……おっぱい、気持ちいいのっ……すごく柔らかくて……んちゅっ」

「ああっ、そんなに吸っちゃ私まで……おかしくなっちゃいそうっ……っ」

さしものかなみも、暴君ではいられなくなっていた。あれほどエッチで意地悪な姉の余裕がなくなり、言葉が喘ぎで途切れがちなのがさらに男の興奮を誘う。

ぐいぐいとお互いの恥骨をこすりつけるようにして腰をグラインドさせ、深く早く、そして激しく肉の振りを打ち込んでいくと肉厚な、懐の深さを感じさせる女性器が全周からミチミチとペニスを締めつけ、幾重もの輪ゴムを貫いて亀頭冠が往復するような激しい快感がペニスから腰骨に、そして脊椎に悦楽の波となって押し寄せていく。

ジュプッ、クチュクチュッ――――ッ。

淫らな水音が細かな発泡音をまじらせ、お互いの肉が打ち合い、ほっそりとした肌が触れあう音が、唇からこぼれる喘ぎ声が悲鳴にも似た呻きに変わっていくのが姉妹の肉悦の高まりを明確に伝えていた。姉妹の秘処はすでに大量の淫蜜にぬかるみ、少年の口もとも下半身も濡れている。

「はうっ、あっ、ああっ――――恥ずかしいの、もう――」

「ひううっ、ナオ君のが激しいの……くふっ、私の奥にいっぱい、ちょうだいっ」
下半身でつながっている二人の肌は汗が湯気に溶け、全身にかすかな震えと断続的な緊張が続いている。もういつ達しても不思議はない。激しく突き上げる直毅とそれを受け止めながら腰をグラインドさせるかなみの動きに、いつの間にか由真の動きも重なっていた。
姉妹はお互いの肌をまさぐり、乳房の愛撫をしながら肌をすりあわせ、お互いの喘ぎまでもがねっとりからんでいる。
はあっ、はあっ、はあっ――。
兄にお尻を抱え込まれた由真は、秘裂からアヌスまでを舐められ、にじみ出る愛液をすすられるだけで幾度も軽い絶頂に達しているようだ。たっぷりと潤った肉花が幾度も収縮しながら蜜を吐き出し、断続的な痙攣がその全身を覆っていく。
すぷっ――。
それは本当にかすかな音だった。蜜をまぶした少年の指が、女の子のもっとも恥ずかしい排泄器官をもみほぐしながら菊花の中心に突きたてられた舜間だ。
「あぐううう。ぅああっああっ――イ、イっちゃう、お尻でぇっ――――」
指を痛いほどに締めつけてくるアヌスの内側の粘膜を感じながら、反射的に少年の動きも大きくなり、姉の子宮を大きく突き上げる。
「あおおっ……わ、私もイッちゃうっ。ナオ君もっ来て…あっ、あああ――――っっ」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円(税込)

思春期なアダム4 聖域の崩壊

[小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃]

全国書店で好評発売中

少女天使の暴走が平和な学園生活を破壊する!!

シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

呪詛喰らい師2

[小説:蒼井村正／挿絵:或十せねか]

全国書店で好評発売中

凄腕退魔士の咲妃を牝奴隷に堕とす新たな敵の登場!

魔海少女ルルイエ・ルル2

[小説：羽沢向／挿絵：ピエ～ル☆よしお]

全国書店で好評発売中

クトゥルフの娘たちが学園祭でメイドさんに変身!?

ルルたちに新たな邪神が這い寄る!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガッ! ①～③
- ビルグリムメイデン ①～③
- 不死の吸血鬼がHSのご主人様を募集しているようです
- 思春期なアダム ①～③
- 呪詛喰らい師[カースイーター]
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!
- 借金お嬢クリス ①～③
- 無敵の姫騎士がHMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ! あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!